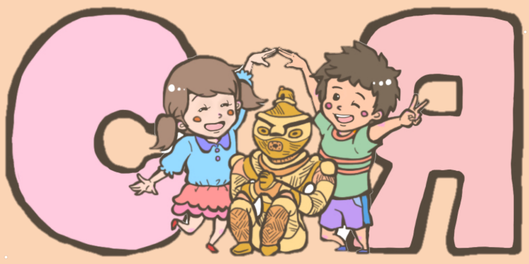

# 高瀬川で遊ぶ
# ～採取した陶磁器片の活用と～

**NPO法人ちゃいれじ／鈴木康二・三原大史・山下（高橋）悠・森田真史・北村麻里緒**

## 1.はじめに

NPO法人ちゃいれじが、京都市街地を流れる「高瀬川」の中で開催したワークショップ『【寺子屋高瀬川】トウジキをみつけよう！～タカセガワのたからもの～』と、そこで採取した近世～近現代の陶磁器片を活用して行った京都市内でのワークショップ、およびこれらのワークショップの参加者（子ども・保護者）の様子から見出せる、「埋蔵文化財包蔵地」指定範囲外における地域の遺産／考古資料の活用と今後の可能性について考えてみたい。

## 2.「高瀬川」の現状とこれまでの経緯

●高瀬川は角倉了以・素庵親子によって、1611年に着工・開削開始、1614年開通の人工河川（運河）。＝「江戸時代の所産」

●河原町五条辺りから北側の高瀬川（とその周辺）は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」として指定されていない（右図1参照。ただし「高瀬川一之船入」は国史跡:指定年:1934年）ため、当然発掘調査は未実施。

未指定の理由：1603年以後（江戸時代以降）の所産であるため

※「埋蔵文化財包蔵地」：いわゆる法律用語で、考古学でいう「遺跡」という概念に近いニュアンスを持つ用語。「地中に埋蔵された状態で発見される文化財（＝埋蔵文化財）を包蔵（内部に含んでいる・包み隠している）する土地、またはその範囲のこと」を指し、広く「周知」されることで、文化財保護法の対象に。※※現在の河原町五条以南（および九条通以北）は「平安京跡」等を想定し、概ね周知の埋蔵文化財包蔵地内に含まれる。

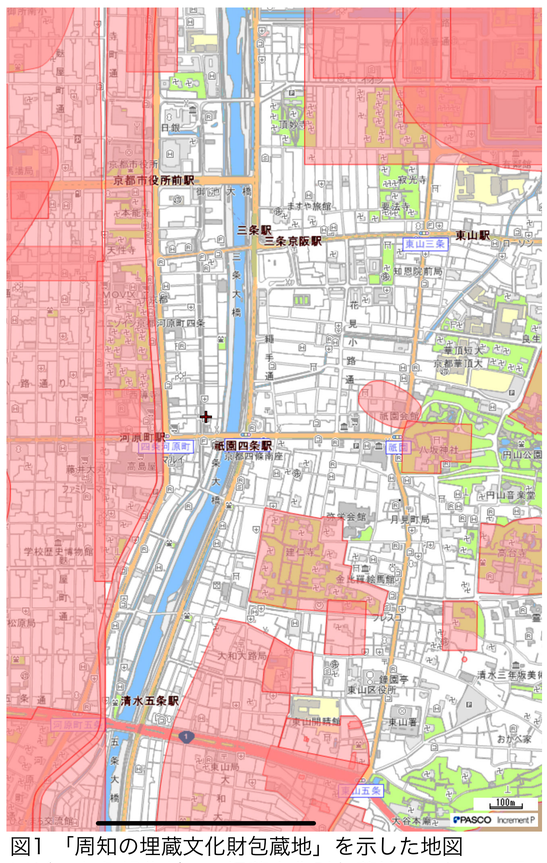


図1 「周知の埋蔵文化財包蔵地」を示した地図
※ピンク色部分が、「埋蔵文化財包蔵地」として「周知」されている範囲。※情報は2021年3月末現在。
https://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto-sp/MapPage?dtp=671&flgInit=1&vpc=0から筆者作成

→高瀬川域についても適宜発掘調査を実施、報告書も刊行。

●高瀬川の改修工事：京都市建設局土木管理部河川整備課による、水辺環境整備事業「高瀬川再生プロジェクト」（京都市：高瀬川再生プロジェクト (kyoto.lg.jp)）

「京都市の中心市街地である木屋町通界隈の景観に重要な役割を果たしている高瀬川は，近年，護岸の老朽化や水枯れの発生から良好な水環境を保つことが困難とな」り、そこで、高瀬川再生プロジェクトとして、

・護岸の補修工事を行い，水量を確保し，将来にわたって高瀬川とその景観を保全
・高瀬川の景観に重要な役割を果たしている街路樹に配慮して工事
・沿川における他事業や地域との連携も含め，周辺一帯の魅力ある水辺づくり

が実施されている。具体的には、川底の砂利を掘り上げ、遮水シートを敷き、その上にまた川底の砂利を埋め戻す施工方法。→施工完了範囲：高瀬川の川底に陶磁器片が露出、採取可能な状況に。

## 3.WS【寺子屋高瀬川】トウジキをみつけよう！～タカセガワのたからもの～

上記状況を踏まえて、陶磁器片採取WSを実施。

●陶磁器片採取WSの大まかな流れ

①高瀬川で事前に採取した陶磁器片を、簡単な解説を添えながら、参加者全員で観察・触察。
②高瀬川に入り、それぞれに陶磁器片を採取。
③採取した陶磁器片に付着した泥などを、高瀬川の中で軽く洗浄。
④採取した陶磁器片を観察、各自自分が採取した陶磁器片の中から「お気に入り」を3点のみピックアップ、「タカラモノ」としてタッパーに入れて持ち帰る。残余破片はNPO法人ちゃいれじで保管・管理。

## 4.参加者の様子

陶磁器採取WSでの参加者の様子の一部を紹介。

●最初の観・触察では、参加者はそれぞれ興味深々で、陶磁器とその年代（江戸期～大正期）を説明すると、大人達はザワザワ、口々に「すごいね!」と呟く。一方子ども達（4～7歳）は、未就学もしくは歴史未習のため、時代も年代も「??」という感じ。おそらく「昔」「古い」という言葉・概念も認識不可。しかしそれでも、高瀬川で拾われた「ホンモノの欠片」に、その目は釘付けだった。

●この陶磁器片が、高瀬川で採取したものであることを伝えると、参加者は、全員半信半疑。大人も子どもも窓越しに高瀬川を見ながら、全員が口々に、「ホントに拾えるのかな?」「(川の)外から見ると、そんなにトウジキがたくさん落 ちているようには見えないのだけれど・・。」と呟く。しかし、実際に川に入ると、多数の欠片があることに気づく。

母「あのアジサイの下の白いの、、手届かない。」
子「僕、採れるよ!」
母子「・・やった！採れた！」こんな調子である。

●ワークショップ終了後、窓越しに高瀬川を見つめていた参加者であるひとりの子どもが、小さくぼそっと「まだ、たくさん落ちてるね…」と呟いた。表情こそは見えなかったが、少し寂しげな、残念そうなその声が、とても印象的だった。

## 5.マコWS＋α～陶磁器片を活用したWS

NPO法人ちゃいれじが、これまでにも何度か実施し、本研究会でも紹介してきた「マコWS」、今回は、京都市内の某寺院からの要請により、同寺院での「お祭り」に際して、高瀬川で採取した陶磁器片を観察・触察素材として活用しつつ、マコWSを実施。また、「＋α」要素として、「染付磁器」の染付絵柄を、鉛筆でトレーシングペーパーに転写する、というワークも併せて実施。

※特に、京都市内でのワークショップということで、高瀬川で採取した陶磁器を、「京都の歴史」「京都ならでは」という視点での要素としても注目して、随所でその説明を付加。

●ワークショップの内容

①本物の真弧を使って、陶磁器片や日常身の回りにある種々の容器類の形をうつしとり、野帳に描く。
②コーヒーマドラーやアイスキャンディ棒など比較的身近な素材を用いて、手作りマコを作成。蛍光ペンなどで、彩色して「自分だけの」マコとして仕上げる。
③「手作りマコ」を使って、自分の指や鼻、陶磁器片の形をとってみる。
④陶磁器片の中から、気に入った染付磁器の染付絵柄を選んで、鉛筆でトレーシングペーパーに転写。

ワークショップの様子（撮影：森下和真）

## 6.おわりに～課題と意義と…～

NPO法人ちゃいれじでは、ここ数年、地元からの要請もあり、毎年8月に高瀬川で「高瀬舟」を素材として、ワークショップを行ってきた。その中で、「高瀬川」そのもの、あるいはそこで採取できた陶磁器片が、歴史系ワークショップの素材として、そもそもとても興味深いものであることを再認識し、加えて京都市による高瀬川改修工事のタイミングも重なって、結果として今回のようなワークショップを開催するに至っている。

高瀬川のうち、五条通以北が包蔵地指定されていない事は前述の通りであり、その是否も含めて賛否両論はあろう。筆者自身は、高瀬川は、近世以降の所産とはいえども地域的特性等を考慮して、少なくとも何らかの文化財としての「指定」をするべきではないか、とも思う。しかしその一方で「指定」されていないからこその、今回のような活用があり得ることも事実、とも考えている。現状のさまざまな状況や、その可能性を前向きに捉えて、今後もできることから少しずつ、取り組んでいきたいと思う。ワークショップの内容やその是否も含めて、諸氏のご指導・ご教示を賜れれば幸甚である。

2021/04/24　第67回考古学研究会研究集会ポスターセッション